

特集 共生科学再考—ウィズコロナ時代の「共生科学」とは

感染症と共生していくためにすべきこと

—看護学の立場から—

兎 玉 ゆう子

はじめに

感染症と私たちは新型コロナウイルスに関わらず、これまでも共生していた。ウイルスはヒトや動物など生き物と共生しないと生きのびることができない性質を持っているためである。

新型コロナウイルスのパンデミック下で、看護職として有している知識を活用し、人々の命を守ることに資するための行動をすること、つまり、看護師の役割を再認識し「身近な人だけでなく、少し外側の人にも自分が持つ知識を活かした行動を起こすこと」をどれだけの看護師が認識し取り組めたのだろうか。

新型コロナウイルスの感染拡大は、看護職にとって改めてその存在意義を考える出来事にもなった。

私は新型コロナウイルス感染が徐々に広がり始めたころ、「教育学研究科に看護師として在籍している私に何ができるだろうか」と考える機会をいただいた。その時に行きついた切り口は、本学の3つの約束「人を認める」「人を排除しない」「仲間を作る」であった。つまり、「相手を知る」「かかった人、かかった人をケアしている人、その家族を排除しない」「正しい知識をもつ仲間を増やそう」ということである。特に「正しい知識をもつ仲間を増やそう」という取り組みは、看護の重要な役割の一つである健康教育そのものである。

私は2020年の年明けからの11か月の間に、星槎に身を置く一人として、看護師として、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の活動にいくつかかかわった。そのうちの代表例であるプレアカセミナー（星槎中学高校の生徒、そして今後星槎での学びを考えている小学生を対象としたオンライン講義）での取り組み、High School Japan Cup 2020、SAAB2020での取り組みと結果を記し、これが共生、共生教育にどう役立ったのか、将来の検証のための材料を残したいと考える。そして、看護師としての立場で今後取り組むべきと考えていること、看護教育の役割についても感染症と共生を看護の立場から考えてみたい。

1. プレアカセミナーでの取り組み

星槎中学高校の生徒、そして今後星槎での学びを考えている小学生たちへ、新型コロナウイルス感染症についてZoomを使った講義をしてほしい、という連絡を4月に大学院事務局

の吉川遼氏からいただいた。そして、助教の津田絵美氏の多大な支援をうけて準備をし、50分ほどの時間であったが、「相手を知る」「かかった人、かかった人をケアしている人、その家族を排除しない」「正しい知識をもつ仲間を増やそう」を基本として、生徒たちに話をした。

まず、基本的知識編として、感染とはなにか、感染症とは何か、ウイルスとは何か。そして、SARS-CoV-2（Severe acute respiratory syndrome coronavirus 2：重症急性呼吸器症候群：2003年に流行した重症急性呼吸器症候群（Severe acute respiratory syndrome = SARS）と姉妹関係にあるウイルス）と COVID-19（コロナウイルス疾患（Corona Virus Disease）で、2019年に最初に患者が報告されたもの）を正しく使い分けようということを説明した。この違いはほとんど説明されていない。しかしながら、これもヘルスリテラシーであると考えられる。したがって、正しく相手を理解し、正しい知識を持っていただくためにも、この2つの言葉については、時間を割いて説明した。COVID-19という言葉は多くのメディア、日常会話でも使われているが、ウイルス自体のことを話すときなどに使用するなど、大半が使い方を間違っている。大人でもその違いを知る人は少ない。

ところで、感染症を断つには、関わる人全員が同じルール、タイミングで手洗いや消毒をするなどという動作を徹底することが、看護の世界においては常識である。一人でも順番を間違えたり、使う消毒材を間違えると、それをきっかけに再び広がるからである。このように、感染症対策では「なんとなく」は通用せず、全員が徹底した予防策をとることが、感染経路を断つ基本となっている。したがって正しく用語を使えることはこの基本であり、この2つの用語を理解してもらうことは、用語を正しく使える人材を増やすための私なりの挑戦でもあった。

この日、一番注目を集めたのは、図1に示す写真であった。私が、小学生～高校生向けの



図1 コロナウイルス感染症患者の治療の様子（模擬患者）

講義の準備をしていることを実際に治療にあたっている知人に話したら、その実際の様子を再現し、写真を撮って送ってくれたので、提示することができた。これまでに ECMO（体外式膜型人工肺 :extracorporeal membrane oxygenation）を使った治療を何例もしている知人が送ってくれた1枚の写真から伝わるリアリティは、かなりの衝撃だったようだ。Zoom越しに、静まり返った様子をここまで感じたのは初めての経験であった。

次に、新型コロナウイルスの特徴と特徴ゆえの予防の仕方について説明した。とにかく、自分の体に入れない（手に付けたままにしない）努力をしよう。他のウイルスと異なり、人体に入る前でも生きのびる時間が長いこと、エンベロープウイルスであることなどである。エンベロープウイルスゆえに、アルコール消毒が効くという話も子どもたちは初めて聞く様子であった。なぜ、アルコール消毒をしたほうが良いのか。なぜ石鹸で手を洗うことが有効なのか。その根本を理解することは、正しい手指消毒、手洗いへのトリガーになると考えての説明であった。

3つ目に、なぜ「Stay Home!」と言われているのか。その理由について、考える時間を作った。実際に用いたスライドを図2に示す。

このグラフは、日本国内の3月時点での感染者数と死亡率の年代別分布である。「今回流行っている感染症は、10代の自分たちがかかってもすぐに死を心配する事態にはおそらくならない。しかし、一緒に住んでいるおじいちゃん、おばあちゃんにとっても命の危機が迫る事態がおこりうる」ことを説明した。志村けんさんの死が象徴的であったように、新型コロナウイルス感染症は、昨日まで会えていた人に会えなくなる可能性がある。そして、自分が持ち帰ったことにより、感染が広がることもある。大切な人を守ること、大切な人とい

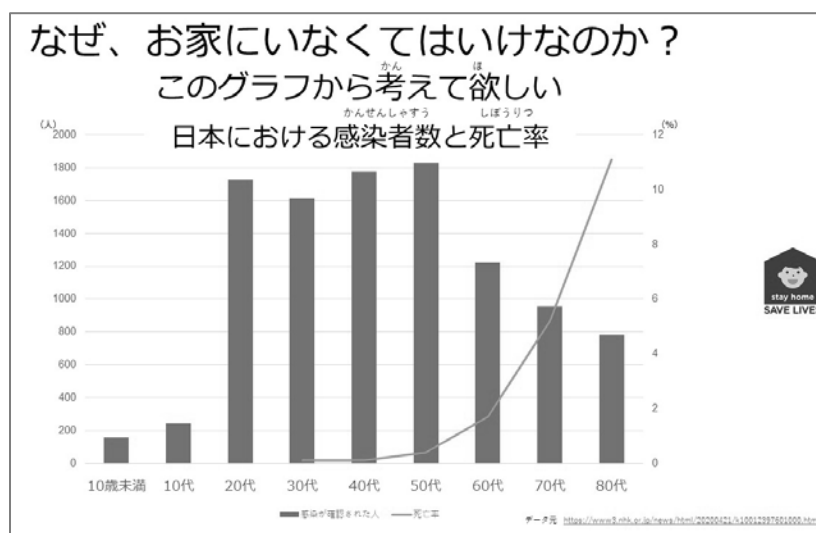


図2 日本における年代別感染者数と死亡率 (2020年3月時点)
データ元：NHK ニュース (2020) のデータをもとに作成

までも一緒にいられるためにも各人の努力が必要である。それが感染源に近づかない、家にいる。という選択肢に通じるということを説明した。自分の身近な人の命を守るためにも、家族や友達との共生を継続していくためには、元気な自分たちが努力しなくてはならないことがあることを伝えたかったからである。

最後に、感染症は誰もがかかる。そして自分もかかる可能性があり、かつ死の危機に直面しながらもケアにあたっている人がいる。また、その人を支えている人・家族がいることに触れた。医療者の家族が保育園での受け入れを拒否される、などの報道があったからである。医療者がいなくなるとは、自分がかかったときに医療を受けることができない。お互いに支えられて社会が成り立ち、みんなそれぞれに努力して、支えあう社会、共生できる社会をともに作ろう、ということ伝え、質問をうけ、講義を終えた。質問も多岐にわたった。「お刺身は大丈夫ですか？」というものから、つり革への対応、帰宅時の対応など、身近な質問があったことは、聞いている皆さんが自分の生活に取り込もうとしてくれた証と捉えている。

ところで、この取り組みの見本は本学修了生の高崎順子氏、松崎幸江氏が取り組んだ共生教育実践演習である。両氏は自身が勤務する病院（ときわ会 常磐病院）の付帯施設である学童保育の子どもたちを対象に、それぞれ AED 研修、手洗い研修を実施し、命を守ること、インフルエンザ予防の重要性を伝え、子どもたち自らが命を守れる存在であること、感染症を広げない役割を持っていて、病院にも貢献している。さらには「常磐病院のメンバー」「共生している仲間」として行動してくれることが、地域医療を守ること、地域における共生にもつながると考え、共生教育の内容を組み立てていた。修了後もこの取り組みは継続されており、子どもたちは AED の使い方をマスターし、1 年後であっても上手に使えるようになっていたり、学童内でのインフルエンザの集団感染も防ぐことができた。そして命の大切さ、仲間も大切にすることなどを学びとっていたという報告を聞いていた。この成果を知っていたからこそ、小学生であっても健康のこと、ウイルスや感染予防を分ってもらえると、自信をもって今回の講義を実施することができた。

この講義の成果かどうかは分からないが、星槎中高関係者にこれまでコロナウイルス感染症は発生していない。これらの事実を踏まえると、ウイルスや感染症、その予防に関することを分りやすく伝えることができれば、中高生であっても十分に予防行動がとれることにつながり、有効な感染予防対策となることが示唆される。

2. High School Japan Cup 2020

9 月 25 日～27 日 箱根町にある星槎レイクアリーナ箱根で High school cup 2020 として、フェンシング競技のインターハイの代替えともいえる大会が開かれた（High school cup 2020 (2020)）。子どもたちには一生に一回の高校生 3 年、2 年、1 年それぞれの締めくくりの大会を経験させたい、という主催者の信念で開催された大会でもあった（詳細は 2020 年 10 月 26 日発行の星槎スポーツ新聞を参照いただきたい）。

スポーツの大会、イベントは年明けからの日本国内におけるコロナウイルス感染症の拡大の影響で、軒並み中止または観客数に上限が設けられての開催である。そのような制限の中、徹底した感染管理の下で、High school cup 2020 は開催された。

私は医療資格を持つ一人、公衆衛生の資格を持つ一人としてその大会に関わらせていただいた。一定規模のスポーツ競技大会を開催するには医療資格従事者がそばにすることが求められている。今回はその役割とともに、コロナウイルス感染症のスクリーニングの役割があった。コロナウイルス感染症拡大下でなければ、コートサイドにいる私たち医療者はほぼ「空気」で、待機しているだけである。安全に競技が行われ、2019 ラグビーワールドカップの時のように酔っ払って怪我する人の手当てもなく、感染症の心配もなく、ただ単に見守ることが仕事となる。

しかし、今回は違った。私たちがゲートキーパーだった。つまり、その場にウイルスを持ち込むかどうか、その判断が私たちに課せられた。初めて建物に入るときにそれまでの2週間あまりの体温の記録を持参する参加者に、体調不良は？ 周りの人には？ とヒアリングし、入館を許可するかどうか判断するという役割だった。普段、COVID-19の最前線にいない私にはこのウイルスの発見以降、一番ドキドキした時間だった。国家資格の重みとはこういうことか、と大会期間中はその重みを感じずはいらなかった。幸いにして、その場で検査というような事態はなく、大会は無事に閉幕した。そして、その後2週間以上経過後も発症の報告はなく、無事にすべてが完了した。

当日のみの、メディカルスタッフとして、神奈川県近郊に住む在学生の二宮佳与氏、修了生の村上亜紀氏、細川朱美氏とともに参加した私は、決められた時間に出向き、指示された仕事をしただけであるが、その感染コントロールぶりは高校生の大会とは思えないほど、徹底されていた。たとえば、2メートルの距離でもゾーンが違えばICチップの入ったカードをかざさなければ入場できない運用になっていた。保護者の観戦には制限がかけられていて、遠く箱根の山の中まで子どもを連れてきたけれども、親御さんは試合を見ることができない運用となっていた。

当然のことながら、会場内はソーシャルディスタンスである。会場のいたるところに手指消毒材（三歩歩けば消毒剤だった）が設置されていた。そして選手たちは防具内に取り付けるフェイスガードの調整に余念がなかった。「フィット」しないと複数回フェイスガードのフィルムを取りに来る学生もいたほど、神経質に調整をしていた。必死にミリ単位の調整をしている姿に何枚でも渡してあげたい気持ちを抑えるのが大変だった。

学生たちにはフェンシングの防具であるマスクをつけていなときは常にフェイスマスク装着が義務づけられた。たとえ数メートルでもマスクを外し、フェイスマスクを付け直し、ピスト（フェンシングの主戦場）に向かっていった。このように律儀に感染防止対策を行う姿を見るにつけ、何度となく、「マスク付け直さなくていいよ～～、わずか3歩のために」と言いそうだった。決められたルールを徹底する彼らの行動は、東京オリンピック後の日本のフェンシング、スポーツも強さを維持できることを予感させるものであった。

このように徹底して各自が規律を守っていたからこそ、大会にコロナを持ち込むこともな

く、大会から持ち帰ることもなく終えることができたのだろう。部活の顧問の先生をはじめ、各高校の先生方、保護者の方の教育力の高さも感じた大会であった。

3. SAAB 2020

2020年11月14日、本年度SAABが開催された。ここでもやはり、例年にないことが感染対策であった。中高の責任者の先生方は、High School Japan Cup 2020のスタッフとしての経験をされていた。そこでの感染管理の経験はSAABで活かされ、「あの時のように、完璧にはできないけれど、なるべく近い感じで実施できるように(準備を)すすめましょう」が、私たち感染対策チームの事前の合言葉であった。

実際の運用は神奈川県がイベント時の感染対策ガイドラインとして示している内容にそって行われていた(神奈川県(2020))。特に、開催直前に近隣の病院で院内感染の広がりや報告されたときには、このまま開催して大丈夫だろうか、とその情報を責任者とも共有しながら調整を行った。そして、検温、感染対策の担当者には事前にメールでの情報共有が行われ、当日に備えた。私も当日は看護師として検温、健康チェック担当としてかかわらせていただいた。星槎中学高等学校では、感染防御策として6月から登校時にサーモグラフィによる検温が実施されている。開催当日も生徒は登校時に検温をうけ、さらにおおよそ3時間ごとに体温チェック、手指消毒をしながら様々なイベントに参加していた。一日3回、検温が行われ、検温後のワッペン貼りや消毒では大学の西永堅先生、大学事務局山本健太氏にも活躍いただいた。

SAAB開催から2週間以上が経過するが、ここまで発症者の報告はない。3回の検温に協力してくれた生徒たち、プログラムが変わるごとにアルコール清拭を担当してくれた消毒係の生徒、参加者一人ひとりの高い意識が、例年にくらべ少ないとはいえ、多くの人が一同に集まりながらも感染の発症ゼロに封じ込めたのであろう。

4. 感染症に強い組織づくりのために—看護学の立場から今後に向けて

幸いにして、執筆時まで星槎グループ関係者からコロナウイルス感染症発症の報告はない。各人の感染予防行動はもちろんのこと、各校舎での感染予防対策が一定の効果を示しているのであろう。しかしながら、看護師、保健師である私には2つの大きな懸念事項がある。

一つ目は、新型コロナウイルス以外の感染症に対する対策である。2020年11月下旬になり、ブラジルからは麻疹流行のニュースが届いた。恐れなくてはいけない感染症は新型コロナウイルスだけではないのだ。思い返せば、1年半ほど前、「東京オリンピック、パラリンピックの開催には感染症対策なくしては、成功はない」と、参議院議員の朝日健太郎氏や内閣官房東京オリンピック・パラリンピック事務局長の平田竹男氏に強く訴えたことがあった。その数週間後、朝日氏は予算委員会でオリンピック開催に向けた感染症対策に関する質問をし、政府からの見解、予算措置するとの回答を得ていた(参議院予算委員会 会議録(2019))。

当時は、成人男子の一部に風疹の抗体を十分に持っていない世代があり、国内で再燃していることが話題となっていたときだった。この質問を契機に一気に予防接種、抗体検査の体制整備が進んだ。今、国のレベルではオリンピックという掛け声により、感染予防対策は講じやすい時期にある。しかし、国の後押しが少なくなった後も、新型コロナウイルス感染症よりも命に関わり、障害を生じさせるようなウイルスや感染症との共生は永遠と続くのである。したがって、今一度広義の感染症対策についても議論し、対策を講じるべきであろう。

二つ目は、教員を含む全職員の日ごろからの健康づくり、特に喫煙の問題である。まだ、初期の患者の分析にとどまるが、国内でのコロナウイルス感染症患者の死亡、重症例の多くは喫煙者であったと報告されている(国立国際医療研究センター(2020))。呼吸器への影響、喫煙時の動作を考えると、感染リスクの高い行動といわざるを得ない。禁煙はなかなか達成できないことではあるが、今一度、健康管理、感染予防の面からも見直しをお願いしたいところである。

最後に、2016年に星槎大学附属研究センターの共同研究費による助成を受け実施した、オリンピック開催時のキャンプ地が備えるべき事柄についての研究に触れたい。選手たちの外傷、内科疾患への対応とともに、感染症対策に言及した。そこに記した感染症発生時の差別への対応が、一気に現実味を帯びることになるとは、予想もしなかった。この研究で取り組んだ方向性が間違っていなかったことに安堵するとともに、この研究成果を振り返り、さらに具体的な対策を講じ、星槎グループの施設で事前キャンプをする国々の選手が安心して最終調整できる環境を整えることに関しても、看護師として責任をもって実行したいと考えている。

5. 感染症との共生と看護教育

COVID-19の治療の最前線で活躍している仲間への敬意を表し、まとめに変えたい。

看護教育研究コースのメンバーである学生の中には、春の流行期にCOVID-19に対応する病棟での勤務を経験した学生や、電話相談窓口の応援に駆り出され対応した学生、病院の人員不足を補うために、学校から病院へ応援勤務となった学生などがある。また、多くの看護教育に携わっている学生は実習や講義形態の変更への対応に追われている。一人ひとりの学生が新しいストレスと向き合いながら星槎での学びを続けている。修了生も同じである。

このように、在籍している学生、修了生のみならず、多くの看護師、医療者がたくさんの配慮をしながら、医療が途切れることなく提供されるようにと努力している。写真を提供してくれた医師は2020年3月には「久しぶりに家に帰りました。いいタイミングです」と言いながら、私に相談のあった新型コロナウイルス感染症患者の対応策を教えてくれた。そして今は、「この病院、自分が最後の砦なんで。しんどいけど、こんな若い時期に、こんなに仕事させてもらえるなんて、本当に感謝してます」と言いながら、今日も重症患者を診ている。この医師のようにこれまでにかかわった学生が成長し、看護師や医師として最前線で活躍している。誰も逃げ出すことなく、頑張ってくれていることに感謝の気持ちでいっぱいである。

この新型コロナウイルスの拡大により、医療専門職として活躍する人たちの育成に関わる看護教育は、変容が求められている。従来通りの教育方法では養成に限界があることが分かった今、その代替え方法には何があるのか、それらは従来通りの質を担保できるのかなど、新たな課題が突き付けられている。これらの課題に対して、真摯に向き合い、通信制大学院だからこそその解決策が提示できるような研究を続けていきたいと考えている。

おわりに

未知のウイルスはこれからも次々と誕生し、共生を求められるのだろう。新しい感染症と共生するための基本は、早期に新しい情報（知識）を得て、考えられる対策を次々と打ち、そして、ふさわしい対策でその伝播経路を断つことである。

看護師は専門家の一人として、人々の命を守ること、多くの人が安全に生活できるように、自分が持つ知識を最大限に活用し、感染症との共生に資する行動をとるべきであろう。今回の新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策として取り組んだ3つの経験が、今後の新たな感染症との戦いの役に立てば幸いである。

引用文献

- High school cup 2020. (2020). <https://www.japan-cup.org/> (閲覧日 2020 年 11 月 30 日).
- NHK ニュース. (2020). <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200421/k10012397601000.html> (閲覧日 2020 年 11 月 30 日).
- 神奈川県. (2020). イベント開催に関する感染拡大防止の取組について、県への事前相談をお願いします. <https://www.pref.kanagawa.jp/docs/bu4/callcenter.html> (閲覧日: 2020 年 11 月 30 日).
- 国立国際医療研究センター. (2020). COVID-19 レジストリ研究に関する中間報告について. https://www.ncgm.go.jp/covid19/0806_handouts.pdf (閲覧日 2020 年 11 月 30 日).
- 第 198 回国会参議院予算委員会第 14 号 平成 31 年 3 月 26 日会議録. <https://kokkai.ndl.go.jp/#/detail?minId=119815261X01420190326¤t=87> (閲覧日 2020 年 11 月 30 日).